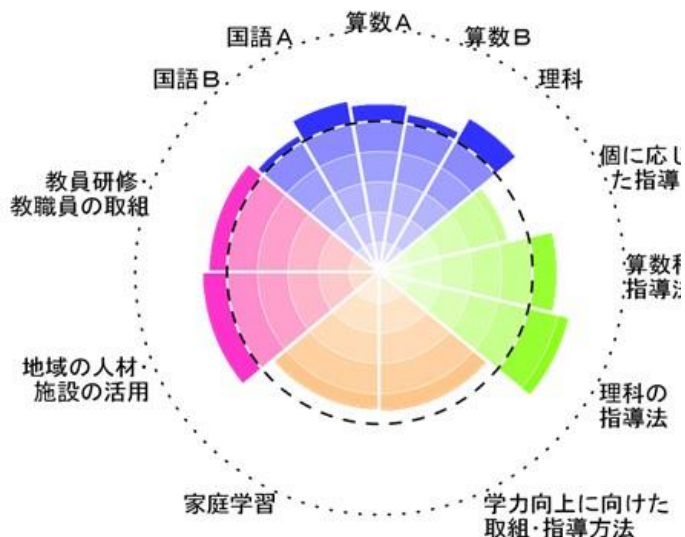


千秀小学校 H30年度 全国学力学習状況調査の報告

概評 全国平均（破線 -----）との比較しての本校の状況

学校の指導の状況

児童の意識の状況



児童の学習の状況は、全国平均（グラフ内の ---線）よりも高い正答率を示しており、学んだことがしっかりと習得されていることがわかる。特に国語・算数のA問題・理科では、高い結果を残している。傾向としては、学習の基盤となる知識・理解・技能の力が高いといえる。一方、その知識や技能を活用していく力については、少しずつ成果に結びついてはいるが、まだまだ、子どもたちの伸びしろはあり、育成を進めていかなければならないところである。これまで以上に子ども自身が課題に対し、自分の考えをめぐらし、集団で互いの考えを深めていくような、「主体的で深い学び」を進める授業改善を進めていきたい。

職員の多くが現状できていないと感じている「個に応じた指導」については、これまでも「算数少数指導」や個別に取り出していた「特別授業」など進めており、算数科の学習で実績を上げてきた。もちろん今後も継続していくが、ここではそういった特設した指導にとどまらず、学級の中での日常的な指導においての個に応じた指導を展開し、少しでも子どもたちの「分かる」を提供したいという教職員の気持ちの表れと受け止めた。課題別授業や1時間ごとの指導内容の細やかな評価の実施とフィードバックしての指導への反映など、個々の学びの過程を重視した指導を具体的に進めていけるようにしたい。

一方、児童の意識等から見ると、自己を有用であり大切なものにとらえる自尊感情の低さが気になる。この項目は、例年、本校の課題としてあがっているものであり、これまでも、自分の持つ「よさ」や「可能性」を信じ前向きに生活する姿の具現を目指して、体験を重視した学習からの成功の喜び、達成感の享受を重ねてきたが、なかなか改善されないでいる。間違いなく、本校の子どもたちは優秀であり、自己評価以上に胸を張ってよい存在であると捉えている。これまで以上に、子どもが発見、達成したこと、取り組んだことの良さを認め、それを個々の子どもに伝え、ともに喜んでいく。愚直ではあるが、これを進めていくことが一番の近道と考える。それは学校職員だけでなく保護者・地域の方にも理解・協力をお願いし、子どもの生活の中すべてで取り組んでいられるように働きかけたい。

各教科結果より

○国語科

正答率からみると、すべての項目で全国の平均と同等か上回っており、しっかり学習されているといえる。その中で「書く」領域での正答率が国や県の平均を大きく上回ることができた。目的や意図に応じた文の構成の効果や話の内容の明確性についての見方が身につけているといえる。また、国語の時間だけにとどまらず、他の教科においても、国語でまなんでことを基盤として国語力を活用する場と考え、指導を重ねてきた成果と考える。一方、これまでも課題であった、話す力の育成については、全国平均とほぼ同等の正答率が90%を示すことができた。昨年度に比較して改善してきたいえる。「話す・聞く」とい

国語A（主として基礎的・基本的な知識・技能が身につけているかをみる問題）結果

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			本校	県	全国
全体		12	76	70	70.7
評価の観点	話すこと・聞くこと	1	90.7	91.0	90.8
	書くこと	1	81.4	74.3	73.8
	読むこと	2	81.4	74.5	74.0
	言語についての知識・理解・技能	8	72.7	66.1	67.0

国語B（主として学んだ知識・技能を活用することができるかをみる問題）

結果

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			本校	県（公立）	全国（公立）
全体		8	56	54	54.7
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	33.3	30.9	33.2
	話す・聞く能力	3	69.0	65.0	64.6
	書く能力	5	45.6	44.2	45.6
	読む能力	2	48.8	48.8	50.8
	言語についての知識・理解・技能	0			

う活動も「書く」と同様に、国語科での学習を基盤として、すべての学習場面を具体的実践の場面ととらえ、指導を重ねていきたいと考えている。特に、今年度は、相手や目的に応じ、自分の伝えたいことを事例など挙げながら、筋道を明確にして、分かりやすく表現していく力につながる学びの場を、授業に位置付け、自己表現することの大好きな子どもの育成を図っていきたい。

「活用の力」という意味付けのB問題では、A問題と同様に、すべての領域、能力で、全国平均と同等かそれ以上の正答率を示している。しかし、A問題ほどには高い数値を示してはいない。問題とする例文の全体像の把握を前提に、文の中心を捉えたり、文の構成を問うたり等、難解になっている点は認めるが、未来を生きる子どもたちにとって、大切な国語力であると考え。多くのすぐれた文章に触れる機会をもち、言語や言葉の決まりなど、学習活動を下支えする事項の習得を図りつつ、文章の全体像を把握する力、文章構成の工夫を図れる力、文と文の関連付けを進める力など、国語力を育てていきたい。

○算数科

算数A（主として基礎的・基本的な知識・技能が身につけているかをみる問題）

結果

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			本校	県(公立)	全国(公立)
全体		14	67	64	63.5
学習指導要領の領域	数と計算	5	68.4	63.1	62.3
	量と測定	4	79.7	71.7	72.7
	図形	3	51.9	57.1	56.9
	数量関係	5	60.9	61.0	60.1
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0			
	数学的な考え方	0			
	数量や図形についての技能	5	71.2	62.3	63.0
	数量や図形についての知識・理解	9	65.4	64.3	63.8

算数B（主として学んだ知識・技能を活用することができるかをみる問題）

結果

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			本校	県(公立)	全国(公立)
全体		10	53	52	51.5
学習指導要領の領域	数と計算	6	60.1	58.2	58.4
	量と測定	4	56.4	52.6	52.4
	図形	2	66.3	60.1	59.9
	数量関係	5	46.0	45.7	45.1
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0			
	数学的な考え方	9	50.9	49.2	49.2
	数量や図形についての技能	0			
	数量や図形についての知識・理解	1	76.7	73.2	71.7

算数についてはA問題・B問題ともに全国の平均を上回り良い結果に結びついている。市の平均を下回った問題はA領域「直径を2倍にすると円周は何倍になるか」という図形の問題である。誤答の分布をみると、4倍や6.28倍といった間違いが、国の平均の3～4倍程あり、顕著な傾向を示している。4倍については円周を求める公式と円の面積の公式との混同が考えられる。6.28倍は定数としての円周率の理解が不足していることに起因する。問題を式に表して検証してみれば、 $(直径 \times 2 \times 円周率) = (直径 \times 円周率) \times 2$ というところが見えてくる。公式の確かな理解だけにとどまらず、それを活用していく力の育成が求められる。さらには「伴って変わる二つの数量の関係を見る力：比例の関係」の理解にもつながるとみることができる。今回のこの誤答の例は、本校の算数指導の課題（今後伸ばしていきたい力および指導の方向）を端的に表している。これまで本校では学習問題の自力解決～相互の練り上げ～まとめ～演習という学習過程を組み、新たな考えの習得と習熟を図ってきたが、どちらかといえば習得に重点がかかり、活用力については演習問題をする程度ですましていた傾向があった。今後は、今まで以上に多様な問題へのチャレンジや他領域の学習時の関連化を図るなど、新たな知識や技能の獲得に加え、活用する場面も設定していきたい。

○理科

分類	区分		対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				本校	県(公立)	全国(公立)
全体			16	66	60	60.3
枠組み	主として「知識」に関する問題		3	82.0	74.0	78.0
	主として「活用」に関する問題		13	63.0	56.0	56.2
学習指導要領の区分	A区分	物質	4	64.0	59.5	59.8
		エネルギー	4	57.6	52.9	53.1
	B区分	生命	4	76.7	71.8	73.6
		地球	6	58.5	49.0	49.5
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度		1	74.4	82.8	82.1
	科学的な思考・表現		12	61.6	54.1	54.1
	観察・実験の技能		1	72.1	70.7	71.1
	自然事象についての知識・理解		2	87.2	76.4	81.5

理科については自然事象への関心態度にかかわる1問を除いて、すべての区分・観点で国の平均を上回っている。よく学習されているといえる。理科においても国語や算数と同様に「知識・理解」に関わる正答率が高く、本校児童の特徴がよく出た結果ともいえる。一方、「活用」に関わる力が弱いかといえば、思考力を見てもわかるように、国の平均をここでも大きく上回っている。決して活用能力が課題というわけではない。活用力の基盤となる知識・理解そして技能の面がしっかりと身につけているので、科学的思考力についても、現在の体験を重視した問題解決的学習の過程を進めていくことで、さらに向上していくと捉えている。

唯一、国を下回ったのが「自然事象への関心・態度」であるが、「学校の玄関の壁に、ひなのいる鳥の巣を見つけ、ひなの様子を詳しく観察することにしました。親鳥の子育ての邪魔をせずに、安全息をつけて観察する方法は」の1問が設定されていた。本校の児童の多くが、「はしごをかけ、直接見る」を選択して誤答となっているが、生活の中に自然があふれ、日常的に触れ合える環境だからこそその誤答と推測されるが、安全への配慮、生物を愛護する態度について、今一度、意識して育成を図っていきたい。関心・態度に関わる設問は、これ1問である。児童の日常的な理科学習への関心をみると、その意欲は高く、楽しんで学習している。この結果に左右されることなく、今後も、楽しい理科を進め、自然科学的な考え方の良さに触れさせていきたい。